

2. 各公園の基本コンセプトと現状等との主な関係

各公園の強み、弱み、機会、脅威のうち、基本コンセプトに反映した要因について、下線を付した。

花フェスタ記念公園	「世界に誇るバラ園を中心に花による感動をつたえる」
<ul style="list-style-type: none"> ・目を奪われるようなバラによる修景 ・国際園芸アカデミーとの連携による人材育成 ・花き振興の拠点として花のある暮らしを提案するなど花の魅力発信 ・公園の魅力を端的に表す公園名称への変更による国内外への発信 	
<p>【重点的な展開】 日本全国、世界をターゲットとした展開</p>	

<花フェスタ記念公園の強み、弱み、機会、脅威> (再掲、以下同じ。)

強み	弱み
<ul style="list-style-type: none"> ・<u>世界に誇るバラ園（品種数、株数）を有する。</u> ・<u>国際的な評価（世界バラ会連合から「優秀ガーデン賞」を授与）を得ている。</u> ・「英国バラ協会友好庭園」や、「モロッコ・ロイヤルローズガーデン」、「アンネのバラ園」、環太平洋ばら友好協定等、<u>国際交流の取組みが他公園と比較して多い。</u> ・高速道路 I C に近く、自家用車によるアクセスが良い。 ・園内には「茶室」を有し、海外からの来客にも好評である。 ・地元可児市において、公園が「誇り」となっており、「市の花」にバラも指定されているように、市のブランドに貢献している。 ・他県からの来園者は約 57% を占めており、広域的な誘致圏を有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・バラの主な開花時期(春、秋)に依存した集客構造となっており、夏、冬の少ない集客数との差が他公園と比較して大きい。 ・<u>バラの見せ方や情報発信がマンネリ化している。</u> ・<u>多くの品種数のバラを有する一方で、植物園のような構成となっており、記念撮影に適したバラのボリューム感を味わえるエリアが少ない。</u> ・バラ以外の花の見どころが乏しい。 ・<u>高い国際的評価を受ける一方、その価値がインバウンドに連動していない。</u> ・主要施設が分散しており、施設間の連携性に乏しい。 ・「花のタワー」の展望台は、眺望性を活かさきれていない。 ・屋内イベント会場となる「プリンセスホール雅」の設備が多目的利用に対応できていない。 ・東ゲート付近の賑わいが乏しい。 ・自家用車で来園者が 90% を超えており、公共交通によるアクセスが弱い。 ・飲食の満足度において、普通以下が約 66% を占める。
機会	脅威
<ul style="list-style-type: none"> ・「清流の国ぎふ花き振興計画」における花き振興の<u>拠点としての位置づけ。</u> ・近隣の施設である「杉原千畝記念館」に関する「杉原リスト」が、世界の記憶として申請中。 ・アメリカ・ポートランドにおいて、「バラ」がまちのブランドとなり、企業誘致に成功している事例の存在。 ・東海環状自動車道の全線開通による関西圏からのアクセス性の向上。 ・新東名高速道路の豊田東 JCT～浜松いなさ JCT 間の開通による静岡方面からのアクセス性の向上。 ・東京オリンピック・パラリンピック開催に伴うインバウンドの拡大機会の到来。 ・リニア中央新幹線開業による交流人口増。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少（少子高齢化）の進行。 ・公園施設の老朽化の進行による陳腐化。 ・バラ株の老齢化。 ・<u>高度なバラ管理技術を担う人材の継続的な確保。</u> ・類似施設との競合。

養老公園

「健康長寿の願いと命への感謝が込められた自然と歴史をたどる」

- ・清流の原点としての「養老の滝」へのアクセス向上
- ・老若男女を問わない健康づくりの推進と子どもの健やかな成長を促す環境の充実
- ・関ヶ原古戦場等の歴史遺産との連携による集客
- ・情報科学芸術大学院大学（IAMAS）、岐阜県美術館との連携や養老天命反転地に触発されたアートの展開

【重点的な展開】シニア世代、新たにアーティストや世界をターゲットとした展開

<養老公園の強み、弱み、機会、脅威>

強 み	弱 み
<ul style="list-style-type: none"> ・開設して130年以上の歴史がある。 ・孝子伝説で有名な名瀑「養老の滝」があり、葛飾北斎も描いた歴史的価値を有する。 ・「養老の滝」が「日本の滝百選」に選定されており、養老山地から湧き出る水「菊水泉」は「日本の名水百選」に選定されている。 ・世界的に有名なアーティスト、荒川修作氏とマドリン・ギンズ氏が設計した芸術作品「養老天命反転地」を有している。 ・「こどもの国」ゾーンは、子ども向けの遊具やフィールドアスレチックが充実しており、家族連れでの来園が多い。 ・春のサクラや秋の紅葉は、東海地方の代表的な観光スポットとして定着している。 ・養老駅に近く、公共交通によるアクセスが比較的容易である。 ・養老鉄道で電車内に自転車を持ち込める「サイクルトレイン」が導入され、広域的な周遊観光のルートとして利用されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の老朽化が進んでいる。 ・「養老の滝」までの主要園路（滝谷沿い）は、地形特性から、厳しい傾斜の園路が多く、ユニバーサルデザインに対応しておらず、休憩施設も少なく、利便性に欠ける。 ・公園自体の広さに比べて駐車台数が少なく、春・秋のピーク時には渋滞が発生する。
機 会	脅 威
<ul style="list-style-type: none"> ・近隣の歴史的な地域資源としての、関ヶ原古戦場周辺等との連携。 ・平成29年に養老公園を主な会場とした「養老改元1300年祭」の開催。 ・東海環状自動車道の全線開通、および養老インターチェンジの供用開始（平成29年予定）によるアクセス性の向上。 ・養老鉄道沿線の広域的な活性化への取組みとの連携。 ・テレビ番組のロケーション撮影の場としての活用による知名度の向上。 ・東京オリンピック・パラリンピック開催に伴うインバウンドの拡大機会の到来。 ・リニア中央新幹線開業による交流人口増。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少（少子高齢化）の進行。 ・公園施設の老朽化の進行による陳腐化。 ・類似施設との競合。 ・レクリエーションに関するニーズの多様化。

世界淡水魚園

「川が育む豊かな自然と文化にふれ、生き物に親しむ」

- ・国営木曾三川公園や各研究機関と一体的に遊びと学びをつなぐ
- ・里川の魅力と価値を発信し、川がもたらす恵みを後世に伝承
- ・「清流の国ぎふ」の南のゲートウェイとして情報発信

【重点的な展開】東アジアなどとの国際交流や国際貢献

<世界淡水魚園の強み、弱み、機会、脅威>

強み	弱み
<ul style="list-style-type: none"> ・隣接する国営木曾三川公園に加え、自然共生研究センター、水辺共生体験館、岐阜県水産研究所、川島パーキングエリア等の一帯が、「河川環境楽園」として有機的に機能している。 ・ハイウェイオアシスとして整備され、川島パーキングエリアからも直接入園することが可能であり、自家用車等によるアクセスが非常に良い。 ・各施設が「水」をテーマとした統一したコンセプトで運営されている。 ・淡水魚の水族館としては世界最大級の水族館を有する。 ・愛知県との県境に立地することから、他県からの来園者が多く、本県をPRする場として適している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・県営公園としては約3.4haと狭小である。 ・公共交通によるアクセスが弱い。 ・当初整備時の役割を終え、有効活用されていない施設がある。 ・「河川環境楽園」の敷地内は、国営・県営・民間と管理主体が異なっており、案内サインが統一されていない。
機会	脅威
<ul style="list-style-type: none"> ・平成27年12月の「清流長良川の鮎」の「世界農業遺産」への登録や、平成28年7月の岐阜県水産研究所内への「内水面漁業研修センター」の開設など、「清流の国ぎふ」を進めていくための中核エリアとしての役割が強化できる機会の到来。 ・東京オリンピック・パラリンピック開催に伴うインバウンドの拡大機会の到来。 ・リニア中央新幹線開業による交流人口増。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少（少子高齢化）の進行。 ・公園施設の老朽化の進行による陳腐化。 ・類似施設との競合。 ・東海環状自動車道全線開通に伴う、関西圏から高山方面へ向かう観光客のシフトによる東海北陸自動車道の交通量の減少。

平成記念公園

「人と自然が共生する里山の暮らしと文化に親しむ」

- ・里山環境を活かした外遊びプログラムの充実
- ・里山文化が育んできた「匠の技」の体験
- ・森林文化アカデミーとの連携による実践的な環境教育の展開
- ・公園の魅力を端的に表す公園名称への変更と利用しやすい料金体系の検討

【重点的な展開】 利用者のニーズに応じた施設配置や管理運営方法などの全面的な見直し

<平成記念公園の強み、弱み、機会、脅威>

強み	弱み
<ul style="list-style-type: none"> ・ハイウェイオアシスとして整備され、美濃加茂サービスエリアからも直接入園することが可能であり、自家用車等によるアクセスが非常に良い。 ・駐車台数は約 3,000 台と、基本戦略の対象となる 4 公園の中で最大。 ・<u>里山を活かした公園整備が行われている。</u> ・<u>遊具や子ども向けのプログラムが充実しており、家族連れでの来園が多い。</u> ・<u>園内には約 40 棟の建物があり、様々な体験プログラムが提供されている。</u> ・入園ゲートの外に、銭湯や青空市場という特徴的な施設を有している。 ・園内には牧場もあり、動物の触れあい体験ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>入園料が有料であり、さらに園内の体験施設がほぼ有料となっており、特に家族連れの利用者にとって割高感が強い。</u> ・<u>再訪したいと思わせる魅力が乏しいため、リピーター率が低い。</u> ・園内にある能楽堂、茶室等の施設を活用しきれていない。 ・入場口から登坂路となるため、全体を見渡せず、回遊性を持つ動線となりにくい構造である。 ・公園区域に隣接した北部に、未供用地(約 76ha)がある。 ・公共交通によるアクセスが弱い。 ・高速道路からの進入路が分かりにくい。
機会	脅威
<ul style="list-style-type: none"> ・東海環状自動車道の全線開通による関西圏からのアクセス性の向上。 ・<u>未供用地における間伐や下草刈り等の里山整備活動の展開可能性。</u> ・新東名高速道路の豊田東 JCT～浜松いなさ JCT 間の開通による静岡方面からのアクセス性の向上。 ・東京オリンピック・パラリンピック開催に伴うインバウンドの拡大機会の到来。 ・リニア中央新幹線開業による交流人口増。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少（少子高齢化）の進行。 ・公園施設の老朽化の進行による陳腐化。 ・類似施設との競合。 ・<u>「昭和」というコンセプトに郷愁を感じる世代の減少。</u>